様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８７０９１９

研究課題名（和文）近代日本における反宗教運動と仏教の論争についての基礎的研究

研究課題名（英文）The Debate between the Anti-religion Movement and Buddhism in Modern Japan

研究代表者
近藤　俊太郎（KONDO, SHUNTARO）

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：００６４９０３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　報告者は、近代日本における反宗教運動と仏教の論争を研究課題として、その論争の全体像を再構成すべく史料を調査・発掘し、蒐集した史料の分析作業を進めた。
　分析の結果、①マルクス主義の宗教批判は宗教者の社会的立場に集中していたこと、②仏教徒による宗教批判への応答は、宗教の内面的・精神的次元を強調するものであったこと、③したがって反宗教運動と仏教との論争が理論的次元では全くかみ合っていなかったこと、④反宗教運動が宗教界に衝撃を与えたのは、宗教者の社会的地位や経済的優位性に対する不満が社会に広範に存していたからであったこと、をあきらかにした。

研究成果の概要（英文）：　This project researched the debate between the anti-religion movement and Buddhism in modern Japan. In order to reconstruct an overall image of this debate, I surveyed, uncovered, and analyzed historical documents.
　In doing so, the following became clear. (1) Marxism’s criticism of religion focused on the social position of individuals professionally involved in religion. (2) Buddhists’ reply to this criticism of religion emphasized religion’s internal and spiritual dimension. (3) Therefore, the two sides of this debate took place in completely different theoretical dimensions. (4) The anti-religion movement impacted the religious world because dissatisfaction regarding the social position and economic advantage of individuals professionally involved in religion existed widely throughout society.

研究分野：思想史

キーワード：近代日本　仏教史　宗教史　マルクス主義　反宗教　宗教批判　無神論　宗教肯定

１．研究開始当初の背景

(1)従来の近代仏教史研究は、明治初年の廃仏毀釈から「信教自由」獲得をめぐる運動、教育勅語との関係、内面的信仰の確立と社会的実践の展開が見られる「近代仏教」の形成、そして明治末年の大逆事件によるその挫折までを主たる研究対象としてきた。それは、いわば「「近代仏教になる」という物語」（大谷栄一）である。そして、その「近代仏教」の指標は、「国家権力の呪縛からの解放」（吉田久一）に求められていた。戦後仏教史研究の価値意識がそこには垣間見られる。

つまり、「近代仏教」は明治 30 年代から形成され、明治末年の大逆事件で挫折すると論じられてきたのである。その一方で、大逆事件以降の仏教はやがてファシズムを支える側に立ち、国家権力の呪縛から自由たりえなかったがゆえに、「近代仏教」としての価値を認められず、研究すべき対象として把握され難かった。

そのため、これまでの近代仏教史研究は、明治期を対象とした成果を集中的に蓄積してきた。大正・昭和期を対象とした研究も近年は増加傾向にあるものの、未だ蓄積が十分でない。大正期は初期水平運動の周辺、昭和期は戦争との関連を主題とした成果が散見されるが、それ以外の問題については未だ研究が本格化したとは言い難い段階にある。

そういった研究状況ゆえに、1930 年代初頭に仏教界に大きな衝撃を与えた反宗教運動についても、概説書でわずかばかり言及される程度であり、その運動に仏教界がどう応答したのかについては研究が進められてこなかったのである。

(2)反宗教運動は、1960～80 年代にかけて、唯物論に立脚した研究者によって注目すべき研究課題とされ、積極的評価が与えられていった。そこでの研究は、しばしば 1930 年代に反宗教論を展開した当事者によって進められたのである。そうした研究は、無神論を唯物論の正しき立場として押さえ、その発展の系譜に 1930 年代の反宗教運動を位置づけるものであったといえよう。それは、運動内部の事情に精通していた人々による研究であっただけに、運動の実態を精緻に描き出すことに成功した反面、分析対象の相対化にとって軽視しえない制約を負ってもいたのである。

また、唯物論に立った研究者による反宗教運動研究は、運動の意義を再確認する作業に積極的ではあっても、その運動が批判した宗教勢力からの応答については、あまり関心を向けてこなかった。そのため、1930 年代のマルクス主義者による宗教批判が、一体どのような衝撃を仏教界に与えたのか、マルクス主義者と仏教徒との論争がいかなる全体像を有しているのかについては、これまでほとんど解明されてこなかったのである。

２．研究の目的

(1)報告者は、こうした研究状況を踏まえ、昭和戦前期の仏教についての研究を本格化すべく、反宗教運動と仏教の論争を研究課題に定めた。ここで反宗教運動に注目したのは、戦後の仏教史研究の理論的枠組みがマルクス主義の影響を大きく受けていること、さらに 1930 年代の反宗教運動の担い手たちの宗教論が戦後仏教史研究でも反復されていることによる。あわせて、反宗教運動研究は、戦後の唯物論的立場からの蓄積が何ほどか見られるものの、従来の仏教史研究では、反宗教運動への仏教界の対応について本格的に問題としてこなかったからでもある。

(2)本研究の研究対象とした昭和初期の反宗教運動は、ソヴィエトからのマルクス＝レーニン主義に基づく宗教批判理論の輸入を契機に進められている。近代日本における社会科学の受容の仕方、あるいは近代日本の仏教が社会科学の受容に際していかなる反応を示したのかを考えるうえで興味深い事例がここにはある。さらに反宗教運動は、天皇制国家の権力基盤としての仏教教団をターゲットにして、批判的に切り込むことになったのだから、ファシズム状況に突入しようとするなかで戦争協力の態度を明確にしていく仏教勢力に対し、宗教批判がどこまで別の可能性を提示しえたのかも重要な問題となる。つまり、本研究は、マルクス主義と宗教の関係、政治と宗教の関係、を解明するうえで検討すべき問題を数多く含むものである。

(3)だが、関係史料を所蔵している研究機関がほとんど存在しないことや、関係史料を所蔵している場合でもそれが断片的であること、さまざまな研究機関に分散して所蔵されていたり、個人所蔵となっていたりすることから、近代仏教史を専門とする研究者間でも反宗教運動と仏教との論争の実態については、ほとんど知られていない。

(4)以上より、報告者は、1930 年代の反宗教運動による宗教批判とそれへの仏教界の応答に関する史料の蒐集を進め、両者の論争を再構成することを研究の目的とした。

３．研究の方法

(1)本研究の目的からして何よりも重要かつ喫緊の課題は、関係史料の蒐集であった。各研究機関（大原社会問題研究所・近代日本法政史料センターなど）や大学図書館（龍谷大学図書館・駒澤大学図書館など）の所蔵史料や古書店で流通している史料をはじめとして精力的に史料蒐集を進めた。さらには個人所蔵されている方とコンタクトを取り、関係史料を蒐集すべく努めた。

(2)分析作業は以下の点に留意しながら進めた。①マルクス主義の宗教批判、②日本にお

ける宗教批判理論の受容とその特質、③反宗教運動の活動、④宗教批判に共感的態度をとった仏教徒、⑤反宗教運動に対抗的組織の結成、⑥反宗教運動への反論、⑦反宗教運動と仏教との論争。より具体的に示せば、以下のようになる。

第一に、マルクス主義の宗教批判理論の特質を、マルクス、エンゲルスおよびレーニンの著作などを調査し、その基本的な性格と理論的変遷を確認した。

第二に、そうしたマルクス主義の宗教批判を、日本のマルクス主義者がいかに受容したのかを、特に反宗教運動前夜に宗教批判理論を整備した佐野学に注目して分析・検討した。

第三に、反宗教闘争同盟準備会を取り上げ、1930 年代に出発する反宗教運動の組織的性格と具体的な活動を解明した。

第四に、マルクス主義者による宗教批判に対して共感的態度をとった仏教徒の分析を進めた。

第五に、反宗教運動に対抗的な性格を持つ組織を調査し、その組織の性格、言論活動の内容と特質を分析した。

第六に、反宗教運動に具体的に反論した仏教徒を取り上げ、その反論の特質について分析を加えた。

第七に、反宗教運動の宗教批判と仏教界からの応答が、いかなる性格を有した論争であるかについて検討した。

４．研究成果

(1)関係史料の蒐集を進めた結果、反宗教闘争同盟準備会の機関誌『反宗教闘争』や日本反宗教同盟の機関誌『反宗教』といった反宗教運動の中心的組織の関係史料の一部、および当時のマルクス主義の宗教批判をめぐる論争の基本史料である中外日報東京支局編『マルキシズムと宗教』（大鳳閣書房、1930 年 5 月）、奥田宏雲編『社会科学と宗教』（大東出版社、1930 年 9 月）、同編『現代思想と宗教』大東出版社、1930 年 9 月）、反宗教闘争同盟準備会編『反宗教闘争の旗の下に』（共生閣、1931 年 7 月）、加藤復雄編『反宗教運動批判』（大林閣、1931 年 10 月）、『仏教より見たる反宗教運動』（1931 年 12 月、中央仏教社）、宇野円空編『反宗教運動の批判』（近代社、1932 年 4 月）など、本研究の中心課題の解明にとって不可欠となる史料が蒐集できた。

(2)マルクス主義の宗教批判理論では、宗教を下部構造（経済構造）の反映として把握する反映論と、宗教が被支配階級の階級闘争への意識を眠り込ませ、結果的に階級支配に奉仕するという宗教＝阿片論、この二つの宗教理解が基調となっている。そこから導き出される宗教批判の方法は、経済構造の変革となるが、ロシア革命の完遂という歴史的課題に直面したレーニンの段階には宗教それ自体の徹底的廃絶を志向する戦闘的無神論の立場であったことが確認できた。

(3)日本における宗教批判理論の受容と整備に関しては、佐野学が大きな役割を果たしたことがわかった。佐野は宗教を階級支配の要具と定式化し、反宗教運動出発前夜に宗教批判の理論的武器が一体何であるのかを明確に示して見せたのであり、その後の宗教批判理論の基本的な枠組みを形成したのである。

(4)宗教批判をめぐる議論が活発化する契機となったのは、1930 年 1 月に『中外日報』紙上で繰り広げられた三木清と服部之総を中心とした論争であった。その論争に裁定を下した川内唯彦が中心となって組織した反宗教闘争同盟準備会は、反宗教運動の中心的組織となったのである。この組織の運動は、理論的な次元で宗教批判を深めるのではなく、大衆の具体的生活のなかで宗教批判を実践していく方向をとった。そのため、理論的には反映論と宗教＝阿片論に拠っていたが、その宗教批判は公式主義的な域を出なかったのである。反宗教運動は、寺院の社会的・経済的優位性に対する不満を背景に経済的搾取の実態を暴露した点が歓迎されたが、その歓迎は反宗教運動の意図したものとは異なる要因に基づいていた。このような運動の意図とそれが歓迎された理由との間にズレが存在していた点は、従来の研究で十分に注意されてこなかった問題である。

(5)マルクス主義者による宗教批判が活発化すると、仏教界からもそれに共感的態度を示す者が出てくる。彼らは、マルクス主義と仏教とが共通した課題を有しているという認識に立って、両者の結合を志向したのである。その立場は、三木清による問題提起を継承したものでもあった。そこには、経済恐慌によって生活基盤が不安定になった大衆への注意と、同時に寺院・僧侶の経済的優位性に対する不満が存していた。こうした立場を示した仏教徒は、資本主義社会の構造的矛盾を打開する根拠を仏教に求めており、その点にマルクス主義との共通項を見出していたことがあきらかとなった。

(6)反宗教運動が宗教界を相手にして宗教批判を全面展開するなかで、反宗教運動に対抗的な性格を持つ全国宗教擁護同盟や反宗教思想折伏連盟などの組織が結成された。機関紙などの分析によって、これらの組織が、反宗教運動の思想的背景たるマルクス主義に国家への背反を読み取り、それに対して国家主義的立場から反撃した点に特徴を持っていたことを解明した。

(7)反宗教運動に具体的に反論した仏教徒は、実に様々な角度から反論を展開しているが、多くの反論を分析した結果、マルクス主義者の宗教理解の平板さを論拠とするものが多く、宗教を社会的機能ではなく内面的・精神

的次元で把握し、高度な教義体系を強調する傾向にあったことが明確となった。また、内面性・精神性を特徴とする宗教が現実状況とどういった関係を構築しうるのかについては立ち入って論じなかった点もあきらかとなった。

(8)反宗教運動の宗教批判と仏教界からの応答の諸相を検討して判明したのは、支配階級への奉仕という宗教の社会的機能に論点を集中した反宗教運動に対し、仏教徒の多くは仏教の内面的・精神的次元を強調することで反論を試みたという事実である。ここには、マルクス主義者の宗教批判と仏教徒によるそれへの反論が必ずしも十分に交差しておらず、論争が論争として成立していなかったということが示唆されている。ここからは、近代の宗教論に一貫する、宗教的立場と社会的立場の二元論とでもいうべき問題が、反宗教運動と仏教との論争にも存在していたことが浮かび上がってくる。

(9)以上の問題に加え、反宗教論の立場から形成された親鸞像には、宗教批判の理論的応用の跡が顕著に見られることがわかった。反宗教論者の親鸞像は真宗教団の護国思想的親鸞像への批判的位相にあったが、それは親鸞の全体像の把握には向かわずに、公式的に反映論と宗教＝阿片論に解消するきらいがあった。その結果、支配階級に奉仕するイデオローグとしての親鸞像ばかりが形成されたのである。ただし、そうした 1930 年代の反宗教論に立った親鸞像は、敗戦後に服部之総『親鸞ノート』によって発展的に継承されており、戦後親鸞論の基調になったともいえる。こうしたマルクス主義の宗教批判と親鸞像の関係は、今後、重要な研究課題として追及されねばならないだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
①近藤俊太郎、「近代日本におけるマルクス主義と仏教（上）――反宗教運動をめぐって」、『仏教史研究』、査読有、第 53 号、龍谷大学仏教史研究会、2015 年、53-86 頁

②近藤俊太郎、「親鸞と社会主義――解放と阿片」、『近代日本仏教と親鸞　2014 年度国内シンポジウムプロシーディングス』、査読無、龍谷大学アジア仏教文化研究センター、2015 年、47-56 頁

③近藤俊太郎、「戦後親鸞論への道程――マルクス主義という経験を中心に」、『仏教文化研究所紀要』、査読無、第 52 集、龍谷大学仏教文化研究所、2014 年、99-159 頁

〔学会発表〕（計 6 件）
①近藤俊太郎、「天皇制国家と「精神主義」――清沢満之を中心に」、第 1 回清沢満之研究交流会（主催：親鸞仏教センター）、2015 年 3 月 16 日、求道会館

②近藤俊太郎、「近代日本におけるマルクス主義と仏教――反宗教運動をめぐって」（"Marxism and Buddhism in Modern Japan: The Anti -Religion Movement"）、「アジア仏教：複数の植民地主義と複数の近代性―第 3 回ワークショップ」（Asian Buddhism:Plural Colonialisms and Plural Modernities Workshop #3 – Kyoto）、主催：京都仏教伝道協会、龍谷大学アジア仏教文化研究センター、京都大学人文科学研究所、アメリカ宗教学会共同国際研究資金、民博現代インド地域研究、近角常観研究会（科研番号 24320018）、近代宗教アーカイブ研究会（科研番号 23320022）、2014 年 12 月 13 日、龍谷大学大宮学舎

③近藤俊太郎、「近代日本における反宗教運動と仏教の論争」、日本宗教学会第 73 回大会、2014 年 9 月 13 日、同志社大学

④近藤俊太郎、「親鸞と社会主義――解放と阿片」、龍谷大学アジア仏教文化研究センター・2014 年度第 1 回国内シンポジウム「近代日本仏教と親鸞」2014 年 5 月 17 日、龍谷大学大宮学舎

⑤近藤俊太郎、「戦後仏教史研究の一断面――二葉憲香の親鸞論」、日本宗教学会第 72 回大会 2013 年 9 月 8 日、於國學院大学

⑥近藤俊太郎、「二葉憲香の親鸞論――戦後仏教史研究の一断面」、龍谷大学仏教文化研究所第 4 回談話会、2013 年 7 月 22 日、龍谷大学大宮学舎

〔図書〕（計 3 件）
①近藤俊太郎、『よくわかる宗教学』、ミネルヴァ書房、2015 年、120-125 頁

②近藤俊太郎、『日本仏教の受容と変容』、永田文昌堂、2013 年、209-238 頁

③近藤俊太郎、『天皇制国家と「精神主義」――清沢満之とその門下』、法藏館、2013 年、249 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
近藤 俊太郎（KONDO SHUNTARO）
龍谷大学・仏教文化研究所・研究員
研究者番号：00649030